

シリーズ隠れた建築紹介～ある彫刻家の木造アトリエ～

富山市の駅北の開発もかなり進み、併せて北にのびる道路もまっすぐに広げられつつある。そんな中にひっそりとその流れを保っている運河がある。私がこよなく愛する馬場公園と神通川、その周辺の運河沿いは実はとても豊かな空間だ。春には桜、時間差で八重桜も咲誇り、騒音のないお花見が楽しめる。土手には緑が繁り、野菜が生り、川の向うに沈む夕日が、中州の水鳥たちの影を長くする。そこにはもちろん広い空もある。……



さて、前置きが長くなったが、この風景のおへそにあたるどころ（…と私は思う）に、まさに隠れた建築、彫刻家・小柳津三郎氏のアトリエがある。氏は80数歳。彫刻作品は富山市や

富山大学のキャンパスに何点かあり、実直で魂のこもった、目に光があるのが印象的な作品だ。

アトリエはすまいと一緒にあって、平入の木造平屋の横に素くっ立っている。外壁の下見板は赤く塗られ、窓枠は黄。といっても雨風に色はさめ、程良くなじんでいる。軒先の瓦をはずしてガラス窓も大きく、北の陽光が均一にいただけるアトリエ内が想像される。昭和の半ばに建てられたと聞いたので、40数歳といったところ。このすまいとアトリエは今住人を失っているがいつ見ても背筋を伸べて立っているように見える。こんなにさりげなく水と空と緑とを我がものにして、木を彫り、石膏を練り、作品と格闘する……アトリエの中の雰囲気、氏の気迫が、想像される。

聞くところによると、氏のご家族の方々がこのアトリエとすまいをとて大切に、手入れし続けておられるとのこと、空家であっても生きて輝きを感じるものは、こういうことだからだ。魂がそこにある。

実は、私はここの近くの住人で、毎日のように目している。特に自分とは関係なくても、何となく目に親しんで、ちょっとあいさつしたくなる建物であるんだなあ。その周辺の風景とともに勝手に自分のもののように思ってしまったのだ。この辺りには、昭和の初めの、いやもっと以前からの、富山の文化の香りが漂っている。隠れた建築の香りも…ククン…探しに行こう！

—富山美術工芸専門学校講師・加藤則子

灰色の風景にあるもの(建築探訪「五箇山の合掌集落」参加者より)



世界遺産となり、改めてその合掌の里の魅力に多くの人が集まった。この小さな旅は私にとっても貴重な体験となった。山間の合掌造りの民宿で、炉から立ち上がる灰色の煙越しに主人の語り言葉を聞きながら、私は又ある風景を思い出していた。それは真っ直ぐに整備された道に引切り無しに行きかう車から放たれた

ガスの粒子によってかすんでいる都市の灰色の風景である。同じく灰色といっても、一方は内にありながら青白く光を帯び昇華し、もう一方は外にありながら行場を見失い瀧みのように充満し、私たちのあらゆる感覚をグレーのペールで覆いつくしてしま



う。同じ時、同じ地にありながら、この二つの灰色の風景に人間のいとなみの、又、感覚のずれを意識せざるを得ない。曲がりくねった一本の細い道は家と家と結び、人と人を結び、媒けた梁は時を語り、人を語る。

—富山職芸学院1期生・佐伯亜由美

支部大会シンポジウム開催される



7月26日に北陸支部大会シンポジウムが開催された。今年度のテーマは『開口部の安全性と快適性』。地震だ!! 火事だ!! ドアが開かない! 外に出られない! そんな事が実際に起こっている。

構造躯体に大きな被害がなくても、非構造壁のひびわれ、窓枠の塑性変形等により建具が開閉不能となり機能が失われ、建物主にとっては補修・取替え費用で大被害という問題も起こっている。建物の開口部は環境工学的な性能、防災、意匠などを考えて設計・施工されるべきものであるが、これまで多くの場合、構造担当者、意匠担当者、施工者、建材供給者、建築主等、相互間のコミュニケーションが不足していたのではないかと反省に立ち、金沢工業大学の鈴木有教授をコーディネーターとして5人のパネラーが以下の話題提供を行った。

1. 阪神大震災における建物被害と開口部の被害例 ……YKKap 岡元宣昭
2. 地震時における建物・部材の変形 ……福井大学 小林克巳
3. 開口部に求められる環境工学的性能 ……福井工業大学 西岡哲平
4. 建築設計における開口部のデザイン ……金沢工業大学 水野一郎
5. 建具の性能・強度等についての製造基準及び施工方法 ……YKKap 神永裕光

支部大会参加者の殆どが参加してこの問題の重要性を改めて認識したが、時間制限で十分な議論ができないまま閉会となった。今後の問題提起の意味も込めて、極めて有意義なシンポジウムであったと評価をいただいている。

—福井大学・松下 聡

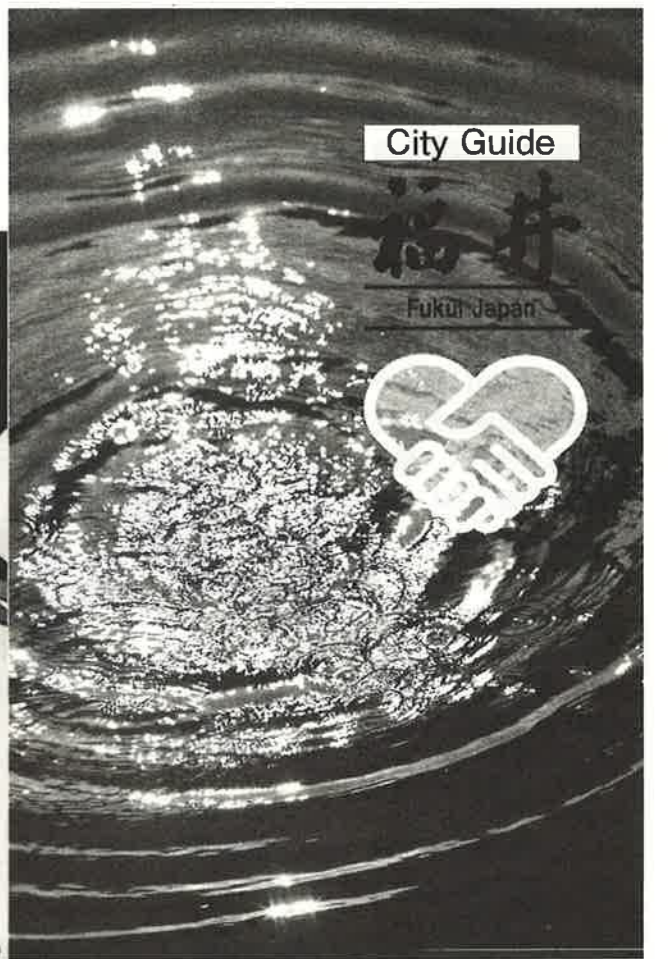
日本建築学会北陸支部ニュース「AH!」第8号

発行日 1996年10月20日発行
 発行 日本建築学会北陸支部広報部会
 松澤 茂(新潟) 尾久 彩子(富山)
 船戸 慶輔(石川) 増田 達男(石川)
 桜井 康宏(福井) 土本 俊和(長野)
 事務局 室田 文男・瀬口さゆり
 〒920 金沢市玉川町5-15
 TEL 0762-20-5566 FAX 0762-60-1502

特集
福井の自立を考える



FUKUI CITY
GUIDE BOOK



支部ニュース「AH!」の第8号をお届けいたします。前号に引き続いて発行が1ヶ月余りの遅れとなってしまいましたことを深くお詫び申し上げます。

さて、第6号からメインテーマとして取り上げている「北陸らしさ」について、今回は、福井で専門的かつ多角的な活躍をされている経済学者と医学者のお二人にじっくりとお話を伺いました。異分野とはいえ、地域に注がれるその鋭い視線は、私たちにも大きな示唆を与えるものと考えます。特に、地域や地球の環境をめぐる最近のキーワードの一つに「共生」というテーマがありますが、「共存」ではなく「共生(共に生きる)」というところに大きな意味があり、その前提として「自立(人々や地域が自分らしく生き、それぞれのアイデンティティを確立すること)」というこの重要性を改めて考えさせられます。

福井の自立を考える

水上：今日の聞き手をさせていただきます。地域計画のコンサルタントをしています。会社は東京ですが、今年から故郷の福井に戻り、在宅勤務の形で出来るだけ地域密着の仕事をしたいと考えています。まず、ご専門の分野の紹介を含めて簡単に自己紹介をお願いしますか。

医学と経済学の視点から

河原：私は大阪生まれです。神戸大で行政法を学び、その後、長崎大の医学部を卒業して厚生省に入りました。保健所や病院勤務も経て、厚生省の国立病院部という部署での医療政策を担当してきました。昔は神経内科を少しやっていたんですが、専門は公衆衛生に変わりました。有病者や障害者を支える社会のシステムづくりに関心を持ったためです。

水上：現職はいつからですか。

河原：2年半前に異動でやってきました。福井県の福祉保健部健康増進課長です。最近、リハビリテーションや痴呆性老人、精神障害者の問題、そしてこれらの要援護者を地域で支えていくケアシステムについて研究中です。まちづくりとも大いにつながっています。



河原和夫さん
福井県健康増進課長

金谷：私は千葉で生まれました。三代前の曾祖父は千葉のやせた土地にピーナッツ栽培を普及した人です。そんな影響もあり、北大の農業経済に進み、その後、中小企業論を扱うようになりました。

水上：どんなねらいがあったんでしょうか。

金谷：当時は高度成長期で、零細企業を無くすことが国策でした。でも、日本の経済を支えてきたのは、こうした中小企業です。何か日本の政策や学問は間違っているのではないかと思いました。「木を見て森を見ず」ではなく「木を見て森を見よう」と思い、ミクロ経済をやることにしました。ミクロからマクロを見ようと思ったのです。

水上：福井へはどのように来られたのですか。

金谷：国民金融公庫に33年間勤めましたが、その間の研究実績が買われて県立大に来ることになったのです。現在、「企業論」と「中小企業論」を担当しています。

水上：そのような企業論の立場から地域をみると、例えばどんなことが言えるのでしょうか。

金谷：マズローの欲求5段階説にもありますが、人間の根元的欲求に自己実現というのがあります。アメリカにはこういう哲学に基づく経営学がずっと以前からありましたが、日本の近代化は「どうやって安く作るか」ばかりを考えてきた。失ったものは大きいでしょうね。

水上：その点、中小企業は自己実現を果たしているといえるのでしょうか。

金谷：地域における中小企業の役割は、一つには「雇用」ですが、もう一つ重要なことは「地域文化の担い手」であるということです。昔からいろいろな地場産業が創り出されてきました。経済人がしっかり文化を認識しなければならぬし、生活の場から考えるということが大切です。お金だけが労働の目的ではない。実際、日本の大企業は地域とうまく行っていません。



金谷真夫さん
福井県立大学教授

水上：中小企業の何が優れているのでしょうか。

金谷：私はいつも「レス・イズ・モア」と言っています。E. F. シューマッハーはオイルショックの頃、「スモール・イズ・ビューティフル」を掲げ、地域主義に基づく人間復興の経済を提唱しました。中小企業はヒューマンな経営サイズをもっており、中小企業の評価が大きく変わってきているのもこのためです。

水上：実は、私が地域計画の仕事を選んだのも、シューマッハーの言葉から出発しているんですよ。地域からの発想で社会を見てみたいというか……。

うわべだけで層が薄い

水上：ところで、お二人とも福井という地域に来て、最初にどんな印象をお持ちになりましたか。

河原：早春の朝早く福井駅に降り立った時の、寒々とした駅前の光景は今でも覚えています。自然は豊かで食べ物や水もおいしいけれど、心の中で何か足りないという気がしました。文化が感じられないというか……。街並みも、建物はあるがランドマークがないし、全体にゴースト的。欲しい本も大阪、東京に行かないと無い。福井は、生活指標でいつも1番、2番になるけれど、うわべだけで層が薄いという気がします。

水上：ご専門の分野ではどうですか。

河原：行政に保健・医療の専門家が少なすぎます。石川、富山でも県内に医者がもっています。福井は私一人です。医学教育にも問題があるんですが、給与面の問題も大きいですね。また、医師が行政の中に入ると、医者の間では落ちこぼれみたいと思われる風潮があり



水上聡子さん
福井地域計画連合

ます。

水上：医学教育の問題とは？

河原：国民全体の85%は健康体です。もちろん完全な健康体ではないにしても……。それでいて残りの15%のことばかりを問題にしている、85%の健康人をどうすべきかという視点が欠落しています。医学部卒業後の進路もほとんどが医療機関で、保健所に入ったり、それ以外は変人扱いですね。

水上：河原さんはどうして行政に入ったのですか。

河原：偉そうな言い方になるかもしれませんが、病院では相手にできる患者は限られてくる。それよりも社会のシステム全体を変えていかなければ……。医学的なリハビリは器具を用いた機能訓練のようなことに限られてくる。都市の構造や地域の受け皿の問題なども考えていかないと、リハビリテーションは完結しない、もっと社会的側面から切り込んでいく必要があると思ったんです。

水上：私も社会のシステムを変えたいと思って現在の仕事につきましたが、とても時間がかかる仕事で、なかなか前に進みません(笑)。

河原：例えば、地域医療で頑張っている人がいますが、そのような人が100頑張れば1実現することに比べ、行政が1頑張れば100実現すると思います。

水上：それだけ行政の役割が大きいということですね。

川上志向で強者の論理

金谷：私の福井の印象は、物価が高いということです。そしてもっと驚くのは、「高くてもいい」という県民性です。これは、強者の論理です。三世代の大家族が多くて、世帯全体の収入があるから、高くても買えるというんです。弱者やハンディをもつ人々にとっては、とても暮らしにくいところでしょう。

河原：他県に本社のある大手スーパーは、福井の方が商売しやすいと言ってますよね。

金谷：福井の経済は川上志向です。つまり、エンドユーザーより大資本家の方を向いており、弱者がどのようなニーズを持っているかを見ようとしません。

水上：その点はどこでもそうだと思うのですが……。

金谷：生活満足度が高いという点で、福井は明らかに取り残された人達に目が行きにくいと思いますよ。実際に豊かです。年寄りが三十過ぎた孫にまで小遣いをあげられる。これでは、みんな真剣に高齢化問題など考えないでしょう。

水上：確かに私のまわりも圧倒的に三世代居住です。

金谷：これからは、どうやって弱者の方に目を向けていくかという時代です。なんとか川上志向から川下志向に変えていくことが課題です。

水上：他にも何かありますか？

金谷：福井は保守性が強い。これに風穴をあけないとダメです。そして、人材の流出をくい止めなければ。80数万しかいないのに……。発想を変えれば、面白いビジネスチャンスがあるはずですよ。

河原：そういえば、価値観が均質ということもあります。何かやろうとする時、比較的まとまりやすい。

水上：でも、保守的の上にも均質ということでは、どこか問題のようにも思いますね。

地域の自立をめざして

水上：ところで、福井について何かいいイメージはありませんか。

金谷：女性が優秀だと思いますよ。女性のファイトと知的水準は、全国でも一流でしょう。

水上：県庁でもそうですか。

河原：やはり仕事ができますね。

水上：福井は、夫婦共働き率が全国1、2位で、自立している女性が多いそうですね。

金谷：これはすごくいいことです。雇用機会均等法ができて、その場限りではダメですね。福井の女性は、もっと誇りに思ったらいいと思いますよ。

水上：それでは、この「自立」というキーワードで、福井の課題は何だと思いますか。

河原：私は、人材の再生産ができることが「自立」の条件だと思います。私がわざわざ中央から来ているのも、行政を経験している医者が地元にはいないからで





す。人材が育っていないし、育てようとする努力をしていない。例えば福井医科大を卒業しても地元に残らないで、出身県に帰ってしまう。生活指標が1、2位でも層が薄いというのは、こういうところにも出てきます。

金谷：私は、「自立」ということにすごく価値があると思っています。なぜかという、リスクを自己負担することだからです。日本の社会の欠点は責任の所在があいまいな所と言われてますが、中小のおやじさん達は責任意識大です。アメリカでは独立している人、リスクに挑戦する人への評価が高いんです。

水上：福井ではどうすればよいでしょう。

金谷：福井は日本の真ん中にあるし、インフラにも恵まれている。知的レベルも高い。ポテンシャルは高いはず。問題は、これらの可能性を組み合わせる仕組みが欠けていることでしょうね。

水上：具体的には……。

金谷：畳の上の水練ではなくて、へ理屈をこねないで水に入って実践すべきです。撤退コストの小さいプロジェクトを沢山つくればいい。中小企業が主体になって、どんどん突き放して分社していく、意図的にライバルを増やして戦略的に提携する、こうしたベンチャースピリットが重要なのです。

河原：先ほどの均質性の話とちょっと矛盾するようですが、福井は藩の単位で見た方が分かりやすいということが多くあります。そして、藩のエゴがぶつかると、施設誘致などのように競合する問題の時に難しくなってきます。県庁の中でもそういう藩ごとの意識を感じますね。

水上：驚きですね。

個々人の自立をめざして

河原：もう一つ行政の問題を言えば、きちんとした評価のシステムが全く無いということです。2、3年で異動するから責任の連続性もない。それと、他県を見て走るという傾向があります。よそでやったからうちもやるというか、よそでやってないならうちでも必要な

いというか、独創性がない。

水上：それでは、いつも三流でいいという感じになってしまいますね。

河原：いいアイデアを持っている人がいても、なかなか実現しない。実現する時には47都道府県でもピリカ中間に……。

金谷：崖っぷちに立とうとしないんですよ。切実感がないんでしょうね。

河原：満足度1番というのが原因でしょう。

金谷：普通は、それで何も問題起こらないようだけど、実際、人材が流出している。福井ではよく「出る杭は打たれる」と言われます。でも、出ないと腐ってしまふ。

水上：私も福井に帰ってきて、何かまちづくりのネットワークに参加できるかなと期待してたのですが、なかなか見えてこないんです。「自立」の風土を創り出すためにはどうすればいいんでしょう。

金谷：肩書きで人を扱うのではなくて、固有名詞で勝負していける社会が必要です。そして、河原課長のように専門家が行政に入ること。それと、マルチジョブをもつこと。つまり仕事とは別に活躍の場を意図的に作っていくことで、視野も広がるし、人も育つのではないのでしょうか。

水上：私は、いつも仕事とおして、市民一人ひとりが自分たちのまちの問題に関心をもち、主体的に参加していけるような社会が必要だと思っているのですが……。

河原：福井県民はおとなしいというか、無関心というか、「O-157」の件だって、県庁に入った問い合わせなんてほんの数えるほど……。やはり県民一人ひとりが絶えず厳しい目で社会を見つめて、言うべき時は言っていないと変わりません。

水上：うわべだけの指標に満足していたらやはりダメですね。私も周りの人たちと手を取りあって頑張りたいと思います。今日はどうもありがとうございました。

—1996年9月26日収録—



レストアの楽しみ



私の趣味の一つに、最近、バイクのレストアが加わった。

レストアとは、古いものを修理したり、磨いたりし、出来るだけ基の型に再生する事で、今では、時間が有ればシコシコとそんな事ばかりやっています。というのは、昨年、念願の限定解除を手に入れ、免許取得13年目にして晴れて大型バイクに

のれる様になったからです。

その後バイク屋廻りをし、ある店の片隅に、事故車と一緒に置かれていたボロボロの750ccのバイクを見付けました。それはちょうど私がバイクに夢中になりだした頃の13~4年前の型で、当然今では姿かたちも見られない貴重なものでした。

私もなんとなく昔の頃を思い出して(本当は10万円の安さにつられて)買ってしまいました。数日してバイクが家に届き、家族や友人の第一声は“本当に走るのか”とか“何てきたない”という私の思い出を打ち消す言葉でした。その日よりレストアは始まり、まず主要パーツを外し、サビを落とす事から初め、メッキは磨き、動かないパーツや古いパーツは雑誌の個人売買で手に入れたり、古いので手に入らないものは別のバイクのものを転用したりしながら、やっとの思いで第一目標の人前でのれるバイクが9ヶ月がかりで完成しました。もうその頃には、初め馬鹿にしていた者も驚く程の仕上がりになり、私も充分満足でした。今は、以前の様にレストアはあまりせず、のる事を楽しんでいるのですが、いつバイクが止まるかハラハラしながらツーリングをしています。

—大和ハウス工業㈱金沢支店・中野昌邦

地域技術

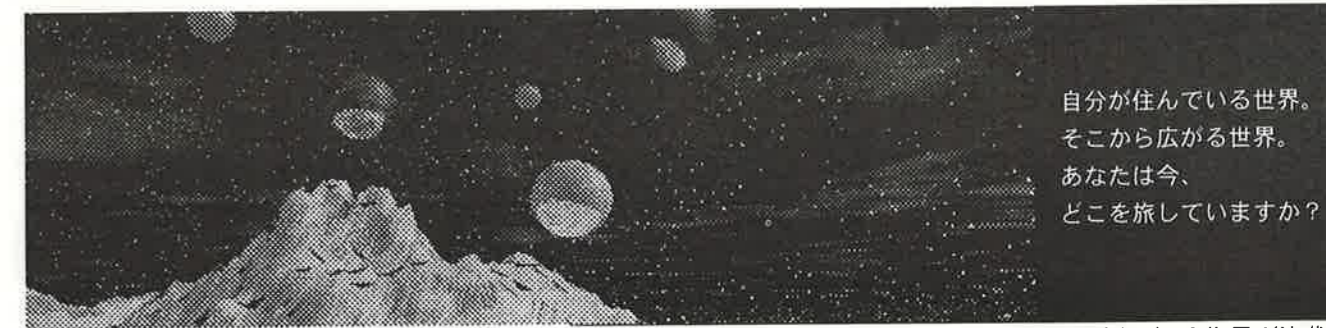
研究所に建築技術者が赴任しました。福井県雪対策・建設技術研究所がスタートして2年目です。従来、コンクリートや鉄筋の破壊試験などを行っていた建設技術センターと、雪に係わる技術開発を行っていた雪対策センターを統合してH7年度に設立されました。スタッフは、H7年度は土木技術者と農業土木技術者、設備技術者が集合していましたが、そこへH8年度に建築技術者が加わったわけです。

さて、私としては、ほっといても雪が解ける屋根や駐車場(電気や化石燃料を使わず)、夏涼しく冬暖かい建物(〃)、建てる時にも壊す時にも早く安全でいて転がしても壊れない工法、リサイクル可・メンテナンスフリーの部材といった技術等の開発が夢であります。(これじゃ本当に夢のようですけど)ただ、行政としての研究にあうものとそぐわないものがあるところが残念です。

ところで福井県(福井市)の統計を調べていると、難しい気候だと思いました。気温を東京と比較すると、夏は高く冬はより低い。特に冬日(最低気温が0℃以下の日)は2倍以上あります。また、雪を降水量に換算すると年間降水量は2倍以上になります。一方で年間日射量は全く変わりません。冬は少ないのですが夏にその分を取り返しているからです。これを本当の“照り返し”というのでしょうか。そのほか、“時々雪国”であることとか、蓄積塩害、嶺北・奥越・若狭の地域差等も考慮にいれねばなりません。

このような当県特異の風土に適した技術の研鑽に努めたいと思っております。皆様のアイデアを是非ご紹介下さい。よろしく願います。

—福井県雪対策・建設技術研究所・山崎 守



自分が住んでいる世界。
そこから広がる世界。
あなたは今、
どこを旅していますか？

近く駅舎を前に



現在長野駅の解体工事が進んでいる。有志の保存運動が実り、市議会によって建物の一部保存の案が採択されるが、先の計画は未だに不透明なままである。

都市の発展を考えると、それが人間の尺度にあった時間の流れの中で行われることが理想であるとするならば、歴史建造物の取扱いはその都度吟味される必要がある。各専門家、所有者そして何より住民の意見が充分に図られ、双方の合意の元に計画が進められることが前提となる。

今回の駅舎の取り壊し劇を振り返ってみると、各者ともに省みざるを得ない点が多いように見受けられる。議論自体を制御してきた計画推進派、着工寸前になって勢いをつけた保存派、それぞれの問題点は否めない。しかし街の主役が本来民意にあるとするならば、常に何らかの意志表明ができる体制を維持していることが望ましい。都市景観や歴史遺産の評価体系を整理し、議論できる場を地域毎に確立するのである。

経済大国としての今日の日本の地位の一端は、間違いなく、こうした開発行為によって担われてきた。また近年多くのヨーロッパの建築家が、自由な表現を求めて日本での活動を切望している現状は、まさにこうした開発天国を反映しているといえよう。しかし、経済性や機能性を基盤とした建設の体制と都市の文化を築こうとする行為は、必ずしも相反するばかりの結論とはならないはずである。残すべき遺産をあまりに多く破壊してきてしまった首都圏の手法をなぞるのではなく、文化を基盤とした地方独自の手法が発言権を得る時代となる今日を大切にしたいものである。

—信州大学工学部社会開発工学科・西山マルセーロ

二度目の成人式

学生最後の正月、帰省して成人式に参加する事も出来ず下宿で黙々と卒業設計に没頭したのは、ついでこの間の様な気がする。それから丁度二十年、看護士で現在大学で経済を学んでいると言う二児を持つ若い御夫婦の住宅設計をお引き受けした。三年程前からマイホーム建設の準備と勉強を始めたと言う御夫婦から「遊び心の有る住宅を設計して欲しい」と住宅雑誌の切り貼りのスクラップブックを一冊提示されての依頼がスタートだった。

一年後、完成居住された施主に感想をお願いすると「私は家を建てるに至って独創的で主体的に関われるものでありたいと考えていました。従って必然的に設計士を入れて設計、監理してもらおう方法しかないと思いました。もちろん自分達の思い描いている事を適切に伝え、その内容を受け止めてくれ現実のものとしてくれることが最大の目的でした。私たちは設計士と共に予算、設計、積算、業者選定など実に多彩な段階を経験し、施工者の選定は設計図書を基に3社の見積りを比較しましたが、金額の差には驚きました。着工から竣工に至るまで問題が出るたびに設計士と共にポジティブな立場でとことん話し合い対策を立てる。一見、地味なようで時間と能力を必要とするこの作業によく付き合ってくれたものだ」と感謝の一言です。」と新津市の内山様より頂戴した。

近年の住宅産業では受注が主力で工事は下請け任せのプロローカ的事例が多いと感じていた。今回元請者の協力を得て設計者本人が工事専門業者と直接工事金、工法、工程まで介入し、その内容をオープンにする手法を取った。その結果、施主の希望を満足すると共に大きな信頼関係の和が出来上がったと思っている。苦節20年!

「二度目の成人式」。一つの記念作となった。

—(有)アーキプロ・渡辺 勝



富山から文化の発信 Autumn' 96



今秋、富山に新しく文化ホールがオープンする。その名もオーバードホール。昭和29年から親しまれてきた富山市民公会堂が、富山駅北に移転、素晴らしく生まれかわる。開館を目前に、市民の大きな期待と注目が集まっている。

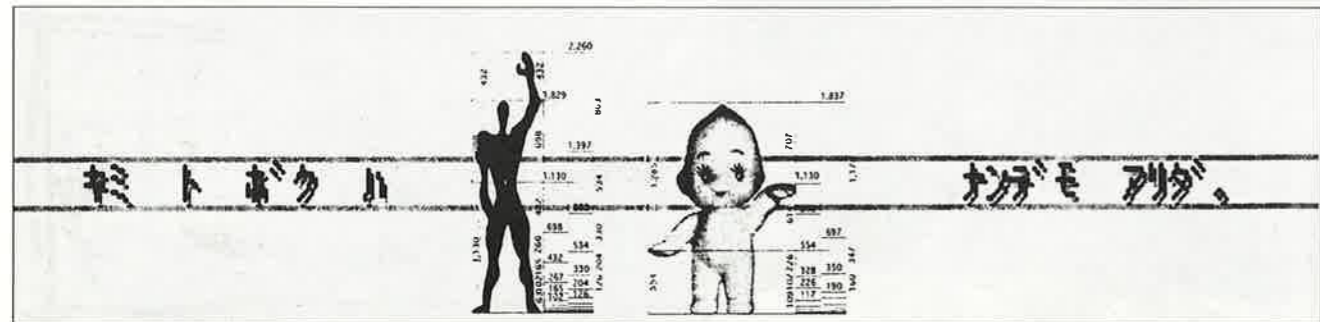
仕事柄、生活の殆どを音楽の中で暮らす私にとって、ホールとの係わりは大きい。富山県内には近年あちこちに新しくホールが建てられている。人口に対するホールの数は、全国トップを誇る。その規模の大小や利用率も様々であるが、数の多さだけを誇っても仕方がない。演奏しやすい、又聴衆として心地よいホール、人々の利用方法によってもそのあり方が重要である。最新のハイテク技術と新鋭デザインによるものであっても、機能性に欠ける場合も多い。座り心地のいいシートは、それだけでもリラックスして楽しめる。又、ホワイエでのくつろぎのひと時は、コンサートをより一層引き立てることも可能である。クロークにコートを預け、ドレスアップしてステキなパートナーとオペラ、ミュージカルやバレエを楽しむ—とロマンティックに夢は膨らんでいく。時にホールはミュージアムにもなる。

新しい創造空間の誕生によって、人々が集い、あらゆる文化の発信が期待される。毎日を慌ただしく過ごす自分を反省し、私自身も音楽を通じて文化の発信ができればと願っている。

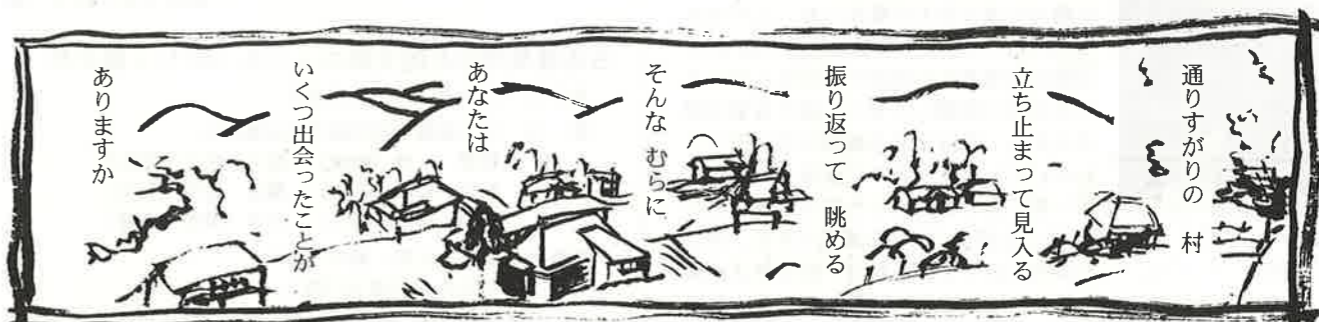
—富山県芸術文化協会事務局幹事・小沢真琴 (おざわまこと/ヴァイオリニスト)

善光寺がある長野市の南の方には、犀川と千曲川という大きい川が二つ流れていて、落合橋というところで交わる。犀川と千曲川に挟まれた懐のあたりは、昔から肥沃なところだったと土地の人はいう。この土地には川中島平と呼ばれているところがある。セギと呼ばれる水路が流れていて、昔は水車がいくつかあった水が豊富なところである。いまでは桃が有名で、収穫時にはセギをつたって桃がゆらゆらと流れてくる。ここに今井村がある。現在、長野冬季オリンピックの選手村が造られていて、近々JR今井駅もできる。道路の拡幅工事も盛んだ。これらの工事で今井村の農地の三分の一はなくなることであった。村の姿は急速に変わるだろう。この村の民家の調査をしていたら、造り酒屋に出会った。周囲に掘がめぐらされた屋敷で、どっしりとした門がある。なかに入ると、主屋は新しかったが、土蔵が古かった。屋敷の北側にある仕込蔵は、いまでは赤茶色のトタンを葺いていた。登ってみると、屋根が二重だった。上には45度ほどの勾配の屋根があって、その下に15度ほどの緩い勾配の屋根がある。下の屋根の上には土が敷かれていた。上の屋根と下の屋根との間は、筒抜けになっていて、風通りがとてよい。温度を一定に保つための工夫らしい。二重の屋根をもつこの蔵を単にサヤと呼んでいたことのであった。また、屋敷の周りにめぐらされた水は、保温のため炭を使っていた昔、防火の目的で設けられたらしい。ということをつかっていると、屋敷全体が仕込蔵の温度を調節するためにデザインされているような感じがする。サヤという造りは珍しいと思ったので、こら当たりにあるかどうか、たずねてみたが、みあたらなかった。

—広報部会・土本俊和



(福井大学大学院生・杉浦徳利)



(長岡造形大学学生・中村智美)